
アステイ

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アステイ

【Nコード】

N5992Z

【作者名】

景雪

【あらすじ】

綾夏は都内の中堅広告代理店に勤めるOL。容姿端麗だが、同性の友人が少なく職場では浮いた存在だった。綾夏はふとしたきっかけでヌードモデルという存在を知り、ちやほやされるヌードモデルに次第とどっぷりとはまっていく。しかし、彼女の背後には知らぬ間に魔の手が迫っていた。クリスマス前、彼女を救ったのは意外にも……

第91回オール読物新人賞公募作品。

KINOSHITAという男

(モデルをお願いします。 駅東のホテルグランデに十四時で)

スマートフォンに届いたメール本文に目を通し、綾夏は約束の時間に十五分遅れてシティホテルに着いた。タクシーを降りると梅雨真っ只中の小雨はすっかり止んでいて、空の所々には薄く青い空が覗いていた。

ロビーに入ると、彼女を一目見てそうだと悟ったように一人の男が立ち上がって、お互い手を伸ばせば指の先が届きそうな距離まで近づいた時、男は微笑みを浮かべながら頭を下げた。

「はじめまして。 エリナさんですね」

明るくはないロビーをぼんやりと照らす、クロエのノースリーブワンピースは紫陽花のような薄紫で映える。クリスチャン・ルブタンのサンダルは良く締まった脚をこれでもかと可憐に伸ばしている。綾夏は自らの全身に眼差しを止めたまま動こうとしない男に対して、瞳を伸ばすように流し目で視線を投げて厚い唇の端を横に広げ、わずかに吐息を漏らした。肩の下まで伸びた良く手入れされた軽やかなストレートの黒髪が、空気に遊ぶようにふんわりと揺れた。

「写真よりもずっと美しい。つい見惚れてしまいました」

男は綾夏の身体を、はけで撫でるように視線を這わせて、口から漏れてしまう息を我慢できないとでも言いたげに言葉を出した。

綾夏は彼の服装に素早く目をやり、ジャケットの上質の生地を見抜いた。足元の革靴は丁寧に磨かれたことが分かる光を帯びていて、そこには天井のシャンデリアが放つ輝きがぼんやりと映っていた。

ここぞという時に格好だけ着飾って程度の良い服を着ても、クリムで磨き上げた靴を履いても、表面上の装いに過ぎない。綾夏は唇の端を更にもう少し上げ、熱い空気を押し出すように息を吐いた。

七二三号室まで、男は綾夏を案内した。彼女はドアを押さえて招

き入れる彼と視線を合わせずに、部屋に入った。音がしない閉め方でドアを閉じた彼は彼女のバッグにそつと手をかけた。定められた置き場所まで、従順にそれを運ぶ執事の態度を真似るかのよう。

「気安く触らないでよ！」

綾夏はエルメスのケリーを、引っ手繰るように自分の手元に強く引いた。

「すみません。失礼しました」

男は一步退いて、頭を大きく下げた。彼女は塊で唾を吐きかけるような蔑みをもってして、男の低くなつた頭を見下した。

「早くしてくれない？ 忙しいんだから」

もう一度大きさに頭を下げて、男は一泊旅行でもするくらいの荷物からキャノン製一眼レフデジタルカメラを取り出した。

綾夏は顔を背けたまま左手の掌を上にし、男に向けて乱暴に差し出した。男はジャケットの内ポケットから白い封筒を出し、彼女の掌にそつと置いた。紙幣が三枚入っていることを確認すると、わざわざこんな物に入れてきた男の配慮を足蹴にするように、綾夏は封筒をバッグの脇に投げた。

ベッドに腰をかけて髪を巻き込むように右手でなでながら、窓の外をぼんやりと眺めている綾夏に、機材をセットしている男が声をかけた。

「何か飲みますか？」

「早くしてつて、言ってるでしょう！」

拳を埋め込むように、綾夏はベッドに上から叩きつけた。音もなくとどまっていた空気の層が崩れて、細かい光の粒が部屋の片隅を埋めた。

男はまた頭を下げて、レンズを綾夏に向けた。閃光に、綾夏は目を細めた。しかしすぐにそれに慣れると、瞳にたたえた水分を輝かせるように、眼球に力を入れた。ふくよかな上唇を持ち上げるように浮かせて、ちょうど指が一本はまるくらい隙間を開かせた。リッブグロスが自ら光を発しているかのように、濡れた光沢をきらめか

せた。

乾いた無機質な音が途切れ途切れに響いた。音はすぐに連なつて、部屋の壁を軽く叩くように感情もなくこだました。

正面を見据えて脚を肩幅に広げ、次には尻の膨らみを押し出して背中を向け振り返るように横顔を覗かせ、今度は片脚をベッドに上げ、ヒールを突き刺すように深く沈めた。

片膝をついてシャッターを押し続けながら、男は被写体の彼女を必死に捉え続けた。彼女は高い位置から男を見下ろしながら、稚拙な撮影技術に嘲笑を浮かべるように口元を緩めた。

「そろそろ脱ぐ？」

「服を着たままの方がいいです。きれいです」

綾夏は髪を両手でわしづかみして持ち上げ、白いうなじを晒した。瞳は男の顔の前に構えたカメラのレンズを斜めから刺し、瞬きをする度にくるんと上向きに整えられたまつ毛が空気を捕まえた。

サンダルのままベッドに上がり、動物のように手と膝をついて尻を突き出した。右手の薬指で下唇を押さえるような位置に置き、指先に舌を絡めた。左手でワンピースの裾をまくろつとする彼女を男が制する。

「今回は、ソフトにいきましょう」

彼女の中の女が凝縮されて詰め込まれている部分に触れようとしていない男に対し、綾夏は聞こえないように舌打ちをした。

その後、ポーズを何通りか簡単にこなして、一時間も経たないうちに綾夏は撮影を終わらせた。

「今日はこんなもんでいいでしょう？」

男は額の汗をハンカチで拭いながら、微笑みを浮かべてうなずいた。清潔に折り目のついたハンカチを見て、綾夏は奥歯を噛んだ。

「良かったら、また呼んでね」

機材を部屋中にはらまいたままの男を置き去りにして、綾夏は報酬の入った封筒を顔の横であおぐようにひらひらと動かし、部屋を出た。去り際、男のポストンバッグに、「KINOSHITA」と

書かれた金属製ネームプレートがつけられているのが目に入った。

ロビーへと降りるエレベーターの中で綾夏は、素人同然で気が弱い男相手に楽な仕事だったと、口の端を歪めて笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5992z/>

アスティ

2011年12月19日23時49分発行